

史跡等の指定等

《 史跡の新指定 》 10件

1 さんのうぼういせき 山王坊遺跡【青森県五所川原市】

津軽半島のほぼ中央部、日本海に面した十三湖じゅうさんこと呼ばれる瀉湖せきこの北岸に位置する中世宗教遺跡である。十三湖周辺には、南北朝から室町時代にかけてこの地を支配した安藤氏に関連する遺跡が多数存在するとともに、中世的景観が色濃く残る。

遺跡は十三湖北岸、安藤氏の居館とされる福島城の北方、山王坊川が流れる沖積地の奥まった山間部の谷間に立地しており、発掘調査の結果、拝殿わたりろう、渡廊、舞台、中門、本殿と考えられる礎石建物が一直線に並ぶ神社跡ひまし、廂を含めた東西7間、南北5間の南面する建物を中心にコの字状に配置された建物群から成る寺院跡といった、中世の神仏習合を示す伽藍が極めて良好な状態で保存されていることが明らかになった。また、造営にあたっては室町幕府と密接な関係にあった安藤氏が深くかかわっていたことは疑いなく、整然と配置された伽藍は南北朝から室町時代における京都との交流を具体的に示している。さらに、十三湖を中心に分布する史跡十三湊とさみなといせき遺跡や福島城などと一体のものとして中世的な景観を構成するなど、中世社会、文化を知る上でも重要である。

2 おがさわらししろあと 小笠原氏城跡

いがわじょうあと 井川城跡

はやしじょうあと 林城跡

【長野県松本市】

松本平の中央部から東部に位置する、室町時代から戦国時代にかけての信濃守護小笠原氏の本拠となった城跡で、平地に築かれた井川城、山城である林城から成る。小笠原氏は、建武元年（1334）に信濃守護に任命されたが、領国統治は安定せず、常に軍事的な緊張の中に置かれていた。文安3年（1446）に勃発する小笠原一族内での家督相続争いは小笠原一族を三家に分裂させ、天文3年（1534）に府中小笠原氏により再統一されたが、天文19年（1550）には、武田晴信ただはるのぶの侵攻により府中小笠原氏も信濃国から追われた。

こうした混乱の中、小笠原氏の居城は15世紀後半には平地の井川城から、防御性に優れた林城に移ったようであり、これは戦国期に全国的にみられる平地から山城へという領主の居城の変化の典型である。また、いずれの城跡もその保存状態は良好であり、室町時代から戦国時代に至る領主の居城の在り方を具体的に知ることができる。小笠原氏の動向

を示すだけでなく、室町幕府や鎌倉府、上杉、徳川、北条といった信濃を取り巻く諸勢力の政治、軍事的な動向を知る上でも重要である。

3 たかしまはんしゅすわけほしよ 高島藩主諏訪家墓所【長野県諏訪市・茅野市】

信濃国一宮諏訪大社の神職や諏訪の領主として古代以来の氏族である信濃国高島藩主の諏訪家代々の墓所である。諏訪よりみず頼水は、関ヶ原の戦いの際に徳川秀忠に従い信濃上田城を攻めた功で、慶長6年（1601）に諏訪の領地を与えられ初代高島藩主となった。以後、諏訪家は明治維新まで藩主を代々務めた。

頼水は寛永8年（1631）に、中世以来の諏訪氏の拠点である上原城近くにらいがくじ頼岳寺を開基して両親を葬り、頼水も父よりただ頼忠のそばに葬られた。2代忠恒は、慶安2年（1649）におんせんじ菩提寺として温泉寺を高島城下に建立した。忠恒が江戸で没しても温泉寺に葬られるとともに、以降の藩主も江戸で死去しても温泉寺で葬られ、2代忠恒から8代ただみち忠恕までが葬られて明治維新を迎える。

頼岳寺のおたまや御霊屋は安政6年（1859）に再建されたもので、三部屋に分かれ、中央に頼水の父頼忠、右に母りしやういん理昌院の部屋があり、それぞれほうきやういんとう宝篋印塔とごりんとう五輪塔を一对とする組み合わせである。左には頼水の部屋があり、安山岩製のせきびやう石廟が収められる。温泉寺の墓所は、基壇を含めて高さ約3mの石製墓標が並び、特に忠恒の墓標には、戒名の刻字部分はひやうしん金泥、標身の継ぎ目には漆喰が充填されている。

以上のことから、近世大名の墓所の在り方を知る上で重要である。

4 ひがしちやうだふんぼぐん 東町田墳墓群【岐阜県大垣市】

岐阜県西南部、きんしやうざん金生山麓から派生する標高15～18mの段丘上に所在する、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて築造された墳墓及び古墳。

台地南西縁辺部に、弥生時代終末期に築造された直径17.6mなど2基の円形墳丘墓が良好に遺存し、近接して同時期の一辺10m前後の方形周溝墓2基がある。古墳時代前期になると墓域は東方に移り、墳長22mなど2基の前方後方墳（前方後方形周溝墓）と一辺14mなど3基の方墳（方形周溝墓）が築造された。遺物としては、口縁部内面に人物、外面の胴部上半に切妻高床建物、シカなどの動物を描いた絵画土器や水銀朱が付着する石臼などが出土した。

本墳墓群は、方形周溝墓が一般的であった弥生時代終末期において円形墳丘墓を採用し、その後、前方後方墳（前方後方形周溝墓）と方墳（方形周溝墓）が築造される段階を経て、

前方後円墳が安定的に築造されるという、古墳成立期の東海地域の状況を良好に示しているという点で重要である。また、線刻絵画土器、水銀朱に関係した遺物は、当時の人々の精神世界や葬送儀礼の在り方を知る上でも重要である。

今回、9基の墳墓及び古墳のうち4基を指定する。

5 みなくちおかやまじょうあと 水口岡山城跡【滋賀県甲賀市】

古くから街道が通過する交通の要衝である水口平野の東端部に位置する古城山こじょうざんに所在する。天正13年（1585）頃に豊臣秀吉の命を受けた中村一氏なかむらかずうじにより甲賀の直接支配の拠点、東国への抑えとして築城されたと考えられる。その後、豊臣政権下で奉行を務めた増田長盛ましたながもり、長束正家なつかまさいえといった政権の重要人物が城主とされるなど、その政治的、軍事的な意味合いは大きい。関ヶ原の戦い後には、正家が西軍に与したために、接收され、その後しばらくして廃城となるが、それ以後も幕府や水口藩により管理され、明治時代以降は公有財産として引き継がれたため、保存状況は極めて良好である。

また、文献史料には、築城にあたって矢川寺やがわでらの堂塔を壊して水口岡山城へ運んでいることや、長束正家が城主となった後に大溝城おおみぞじょうの天守を解体し、その部材を利用したことなどが知られているが、発掘調査では矢川寺遺跡出土のものと同範の軒瓦どうはん、大溝城跡から運ばれたと考えられる軒瓦が出土したことにより、文献史料の記載が考古学的にも裏付けられた。

豊臣政権により甲賀の支配と東国の抑えのために築城された、保存状態が良好な織豊系城郭であり、出土遺物から築城や整備に伴う資材調達の様子が具体的に分かり、当時の築城の在り方を知る上でも重要である。

6 はしはかこふんしゅうごう 箸墓古墳周濠【奈良県桜井市】

奈良盆地の東南部、大和政権成立に係わる遺跡としてその一部が史跡指定されている纏まき向遺跡むくの中に位置する。東から派生する標高75m前後の低い尾根を核として墳丘が築かれ、墳丘の大部分は宮内庁により第7代孝霊天皇皇女の「倭迹迹日百襲姫命大市墓やまとととひもそひめのみことのおいちのはか」に治定され、良好な状態が保たれている。

墳丘規模は、墳長290m前後、後円部径約165m、前方部長135m前後、前方部前面幅約158mであり、築造時期は3世紀中頃から後半と考えられている。墳丘及び周辺の発掘調査によって、墳丘の周囲には、幅約10mの周濠がめぐり、その外側に堤状遺構や外濠が存在する可能性が指摘されるなど、古墳の全体像が明らかになりつつある。

突出した規模をもつ出現期の古墳であり、定型化した巨大前方後円墳の出現だけでなく、大和政権の誕生と発展過程及び当時の社会状況を知る上で重要である。

今回、箸墓古墳の前方部墳端や周濠の存在が推定されている範囲の一部を史跡に指定する。

7 英彦山【福岡県田川郡添田町】

標高約1200mの南岳・北岳・中岳の3峰から成る信仰の山である。山頂には経塚が多数営まれ、山中行場として玉屋般若窟に代表される修行窟が整備された。神仏が習合して彦山権現が誕生し、それを讃える祭礼が整えられると、院坊が智室谷をはじめ各谷に配された。さらに、大講堂を本堂とした伽藍が整備され、彦山靈仙寺としての寺格が確立する。室町時代には熊野修験の影響を受け、金剛界竈門山（宝満山）、胎蔵界彦山を往来する峰入行が開始された。戦国動乱期にほとんどの建物が焼失するが、江戸時代に入ると、小倉藩主細川忠興をはじめ諸大名から寄進を受けて再興を遂げ、享保14年（1729）、靈元法皇より「英彦山」の勅額が下賜された。明治元年（1868）の神仏分離令により、英彦山靈仙寺は英彦山神社（現在の神宮）となり今日に至っている。英彦山靈仙寺（英彦山神宮）の境内域から銅鳥居までの約1kmの大門筋の両側には多くの坊舎が並び、座主院跡には石垣や礎石が極めて良好に遺存している。中岳山頂に上宮社殿が建ち、山頂に至る参道も良好に維持されている。また、神社に姿を変えた修行窟も現在まで英彦山信仰の中核をなしている。このように、英彦山は、我が国を代表する山岳信仰の遺跡で、我が国の修験・仏教・神道の信仰の在り方を考える上で重要である。

8 小熊山古墳・御塔山古墳【大分県杵築市】

別府湾の北岸、国東半島の南端部に位置し、海を見下ろす丘陵上に立地する。小熊山古墳は、九州では最古級の円筒埴輪が出土し、畿内地域で出現した埴輪祭祀の展開状況を知ることができる。墳長116.5mの大型前方後円墳であり、古墳時代前期前半（3世紀後半から4世紀初頭）に属する。御塔山古墳は、小熊山古墳の南南西500mに位置し、九州では稀な家形・囷形・木樋形・船形・短甲形など多様な形象埴輪が出土する。長方形の造出を有する直径75.5mの大型円墳であり、古墳時代中期前半（5世紀前半）に属する。

これらの古墳からは、瀬戸内海を望む九州東北部沿岸における古墳出現後の展開状況、さらには、畿内地域で成立した最新様式の埴輪群の波及から、大和政権との密接な関係性

を有することが明らかになった。このことにより、九州における古墳時代開始期から中期にかけての展開状況を知る上でも重要である。

9 おもなわかいづか 面縄貝塚【鹿児島県大島郡伊仙町】

とくのしま 徳之島最南端の珊瑚礁の浅海に面した海岸砂丘上及び石灰岩地帯に立地する、縄文時代後期（貝塚時代前^{ぜん}4期）を中心とした集落跡である。

昭和3年（1928）に発見された当初から、九州島と沖縄地域を繋ぐ土器群が出土したことから、奄美地域の地理的・歴史的な重要性が注目された。

遺跡は、弥生時代の箱式石棺墓^{はこしきせつかんぼ}や古墳時代後半期から古代（貝塚時代後期）に属する貝層が存在する崖下と洞穴に立地する第一貝塚、縄文時代後期の居住域である海岸砂丘上の第二貝塚、奄美地域の古墳時代後半期から古代にかけて分布する兼久式土器^{かねく}の標識遺跡である第三貝塚、縄文時代中期から後期にかけての崖下と洞穴及びその前面の斜面部から成る第四貝塚によって構成される。奄美・沖縄地域の縄文時代における海岸砂丘上及び石灰岩地帯に立地する集落遺跡の典型であり、九州島と沖縄地域との間に位置することから、両者の関係性の解明にとって重要な存在である。さらに、昭和初期より奄美・沖縄地域の縄文時代研究において常に中心的な役割を果たしてきた意義も大きい。

10 きただいとうじまりんこうざんいせき 北大東島燐鉱山遺跡【沖縄県島尻郡北大東村】

大正8年（1919）から昭和25年（1950）まで、主に化学肥料の原料として重要視された燐鉱石^{りんこうせき}を採掘した鉱山遺跡である。沖縄本島の東方約360kmの太平洋上に位置する北大東島の西端部に所在する。明治43年（1910）、玉置半右衛門^{たまおきはんえもん}が採掘を試みたが取り止めた後、大東島の経営権を取得した東洋製糖株式会社が1919年から採掘を開始した。その後、昭和2年（1927）以降は大日本製糖株式会社が経営した。燐鉱石の積み出し量は、大正末期は1万トン前後であったが、その後増産し、第二次世界大戦中の昭和17年（1942）には最大の7万トン台に達した。大戦後、米国軍政府の直轄で採掘されたが、昭和25年（1950）に閉山した。現在も、採掘場、日乾堆積場、トラック軌道、ドライヤー建屋、燐鉱石貯蔵庫、積荷^{つみにさんばし}棧橋、船揚げ場、火薬庫等、燐鉱石の採掘・乾燥・運搬・貯蔵・積出に至る生産施設が大規模に残る。これほど大規模に燐鉱生産施設が残るのは北大東島のみであり、唯一国内に現存するものとして貴重である。我が国近代農業を支えた燐鉱採掘産業の歴史を知る上で重要である。

《史跡及び名勝の新指定》 1 件

1 ^{よこやまたいかんきゆうたくおよ ていえん}横山大観旧宅及び庭園【東京都台東区】

近代日本を代表する画家横山大観（1868～1958）の自宅兼画室及び庭園で、不忍池の西に位置する。大観は東京美術学校（現在の東京藝術大学）に入学し、明治39年（1906）に、日本美術院を設立した岡倉天心とともに茨城県五浦に移る。その2年後に居宅が火災で全焼したため、東京の下谷区に仮寓を得、翌年この地に本宅を構え、死去するまでここで日本画の創作を行った。

住居は、昭和20年（1945）の東京大空襲で蔵を残して焼失したが、同29年（1954）に大観の強い意思によってほぼ同じ形に再建された。木造2階建ての数寄屋風日本家屋で、1階部分には焼失前にもあったものを再現した客間の^{しょうこどう}鉦鼓洞などがある。2階は画室で、窓を多く設けて自然光を十分に採り入れている。

主庭は建物の南側に広がり、中央部に細長く折れ曲がる池泉を設ける。建物から見て右奥には築山が築かれ、その前には細川^{もりたつ}護立侯爵から贈られた庭石を据える。大観は庭園に植栽する樹木について、自らスケッチで示し、植栽時にも植える位置や向きを指示した。また、樹木などの庭園内の素材を多く画題に選んでいる。

自然の風情を好んだ大観の思想及び感性が大きく反映され、日本の近代の美術史及び造園史の展開を考える上で貴重である。

《名勝の新指定》 1 件

1 ^{きゅうりゅうしょういんていえん}旧龍性院庭園【愛知県豊田市】

愛知県豊田市の^{さなげやま}猿投山（標高629m）の南麓に位置する、近世に造られたと考えられる庭園。龍性院は猿投神社の神宮寺の1つであったが、廃仏毀釈により廃寺となり、その際に建築物は取り壊されたものの庭園は破却を免れた。近年行われた調査によって、地割、石組等が旧態を良好にとどめ、江戸期の絵図とよく一致することが確認された。

庭園は東側にあった客殿からの観賞を主とする。右手奥に最も大きな築山が築かれ、その裾に近いところに滝が造られている。築山は左奥にもあり、右手の築山と左奥の築山との間をなだらかな峰が結ぶ。池泉には出島、岬等が造られ、護岸の石組は入り組んだ曲線を描き、随所に大ぶりの石が配されている。現在は水が溜れており、取水及び排水の経路

も分からなくなっているが、石組護岸がよく残り、石橋も往時のまま架かる。使用されている石の大部分は猿投山付近で採取されたもので、一部には東濃地方（土岐市・瑞浪市・多治見市周辺）のものも含まれている。

旧龍性院庭園は近世の三河地域の庭園文化の広がりを示す良い事例であり、その芸術上の価値及び日本庭園史における学術上の価値は高い。

《天然記念物の新指定》 2件

1 く に 六合チャツボミゴケせいぶつぐんしゅう生物群集てっこうせいせいちの鉄鉱生成地【群馬県吾妻郡中之条町】

元山川の源流部に位置し、かつて鉄鉱石を採掘していた群馬鉄山の鉱山跡で、現在はチャツボミゴケ公園として整備された自然公園の中に位置する。

鉱泉の湧き出し口から約400mの範囲では、鉱泉の湧出によって、水質はpH 2.6～2.9と強酸性を示す。水温は19.6～29.5℃で周囲の気温が氷点下になる冬季においてもほとんど低下せず、年間を通じて高水温が維持されている。また、硫酸イオンや塩化物イオンの他に鉄などの金属イオンの濃度が高い。この環境を好んで生息するチャツボミゴケと鉄バクテリアの生物活動の副産物として、鉄鉱が生成されている。崖部の鉄鉱に含まれる炭化物の年代測定値は1万数千年以上前であり、その鉄鉱にチャツボミゴケの化石やバクテリアの痕跡が見られることから、同様の作用が長期に渡って継続してきたと考えられる。

本地域は鉄鉱生成の歴史とその仕組みを観察できる貴重な場所であることから、湧水や微生物を含む河床とチャツボミゴケ群落、そして鉄鉱石の分布域を天然記念物に指定する。

2 かつやまきょうりゅうかせきぐんおよ勝山恐竜化石群及び産地さんち【福井県勝山市】

福井県勝山市北谷町で産出した恐竜化石と、その産地である手取層群北谷層に設けられた恐竜発掘露頭である。手取層群は福井県、石川県、富山県、岐阜県に分布し、中生代ジュラ紀中期から白亜紀前期（1億7千万年～1億年前）にかけての地層から成る。中生代の化石が良好な保存状態で産出することで知られ、中でも勝山市の恐竜発掘露頭は日本有数の恐竜化石産地である。福井県では、平成元年（1989）から本格的な化石調査を開始した。恐竜化石（フクイラプトル、フクイサウルス、フクイティタン、コシサウルス、フクイベナートル）は、その調査によって発見されたもので、現在は福井県立恐竜博物館

で所蔵されている。標本はいずれも新種記載されたもので、全身の約70%以上の骨格化石がそろそろ標本があるなど、保存状態が極めて良好であり、産出種と保存状態は日本を代表するものである。またその産地から得られた動植物の化石などから、恐竜時代の環境も明らかにされており、学術上重要な標本とその産地として貴重である。

《特別史跡及び特別天然記念物の追加指定》 1件

1 にっこうすぎなみきかいどうつげたりなみききしんひ 日光杉並木街道 附 並木寄進碑【栃木県日光市・鹿沼市】

日光東照宮への参詣道として江戸時代初期に設けられた街道。松平正綱まつだいらまさつなが杉を植栽し、東照宮に寄進したことを記録した並木寄進碑が附属する。今回、杉並木の保護を図るため、旧壬生通りみぶと旧会津西街道沿いで、条件の整った部分を追加指定する。

《史跡の追加指定及び名称変更》 3件

1 へいあんきゅうせき 平安宮跡

だいりあと
内裏跡

ちやうどういんあと
朝堂院跡

ぶらくいんあと
豊楽院跡

【京都府京都市】

↑

(旧名称)

へいあんきゅうせき
平安宮跡

だいりあと
内裏跡

ぶらくいんあと
豊楽院跡

延暦13年(794)、桓武天皇かんむが長岡京から遷都したことに始まる平安京の北辺中央に位置する都城跡。天皇の居所である内裏、国家的饗宴の場である豊楽院から成る。今回、豊楽院跡と、政治や儀式を執り行った朝堂院跡の各一角を追加指定し、名称を変更する。

2 阿波遍路道

あわへんろみち
焼山寺道
しょうさんじみち

いちのみやみち
一宮道

おんざんじみち
恩山寺道

たつえじみち
立江寺道

かくりんじみち
鶴林寺道

かくりんじけいだい
鶴林寺境内

たいりゅうじみち
太龍寺道

みち
かも道

たいりゅうじけいだい
太龍寺境内

みち
いわや道

びょうどうじみち
平等寺道

うんべんじみち
雲辺寺道

【徳島県勝浦郡勝浦町・阿南市・三好市・名西郡神山町・小松島市】

↑

(旧名称)

あわへんろみち
阿波遍路道

しょうさんじみち
焼山寺道

いちのみやみち
一宮道

おんざんじみち
恩山寺道

たつえじみち
立江寺道

かくりんじみち
鶴林寺道

たいりゅうじみち
太龍寺道

みち
かも道

みち
いわや道

びょうどうじみち
平等寺道

空海ゆかりの寺社を巡る全長1400kmにも及ぶ霊場巡拝の道の一部。今回、第20番札所鶴林寺と第21番札所太龍寺の各境内地と、第66番札所である雲辺寺に向かう遍路道(雲辺寺道)の遺存状態の良好な2.16kmの区間を追加指定し、名称を変更する。

3 おにのいわや 鬼ノ岩屋・じっそうじこふんぐん 実相寺古墳群【大分県別府市】

↑

(旧名称)

おにのいわやこふん
鬼ノ岩屋古墳

鬼ノ岩屋古墳は古墳時代後期の装飾古墳2基から成る。その南方約1kmに所在する、古墳時代後期から終末期の実相寺古墳群を構成する4基の古墳のうち3基を追加指定し、名称を変更する。

《史跡の追加指定》 15件

1 みなかみせつきじだいじゅうきよあと 水上石器時代住居跡【群馬県利根郡みなかみ町】

山麓の狭小な緩斜面に立地する縄文時代中期末葉の集落跡。関東において、縄文時代中期後葉までの大規模集落が中期末葉にかけて小規模化していく過程を示す典型例である。条件の整った部分を追加指定する。

2 かそりかいづか 加曽利貝塚【千葉県千葉市】

縄文時代中期に属する直径130mの環状貝塚と、縄文時代後期に属する直径170mの馬蹄形状貝塚から成る、国内最大級の貝塚を含む縄文時代を代表する集落跡。条件の整った部分を追加指定する。

3 したのやいせき 下野谷遺跡【東京都西東京市】

縄文時代中期後半の直径約150mの大規模な環状集落跡。墓と考えられる土坑群が中央部に密集し、それを環状に取り囲むように竪穴建物群が配置される。関東南部では最大級の規模を有し、首都圏にありながら遺存状態も良好である。条件の整った部分を追加指定する。

4 かたやまはいじあと 片山麿寺跡【静岡県静岡市】

静岡平野南東部に所在する有度丘陵の西斜面に位置する奈良時代の寺院跡。駿河国分寺の可能性が指摘されている。伽藍地内の中央北寄りに金堂、講堂、僧坊が軸線をそろえて配置され、南東隅には塔基壇の地業が確認されている。瓦を供給した窯跡も指定されてい

る。伽藍地南西隅の条件の整った部分を追加指定する。

5 く に きゅうせき やましるこくぶんじあと 恭仁宮跡（山城国分寺跡）【京都府木津川市】

ふじわらのひろつぐ藤原広嗣の乱を契機に東国を巡幸したしやうむ聖武天皇が、天平12年（740）から、難波宮を皇都とする同16年（744）までの間、皇都として経営した宮殿跡。その後、山城国分寺に施入された。条件の整った部分を追加指定する。

6 かみおでらあと 神雄寺跡【京都府木津川市】

奈良山丘陵の北東端に位置する8世紀中頃から9世紀初頭の山林寺院。遺構にはぶつどう仏堂、らいどう礼堂、塔と考えられる建物や流路等があり、うたもつかん歌木簡や大量のとうみょうざら灯明皿等の出土遺物から歌のえいしやう詠唱を伴うねんとうくやう燃灯供養等の仏教儀礼が行なわれたと考えられる。条件の整った丘陵東側を追加指定する。

7 ふるいちこふんぐん 古市古墳群

こむろやまこふん
古室山古墳

せきめんやまこふん
赤面山古墳

おおとりづかこふん
大鳥塚古墳

すけたやまこふん
助太山古墳

なべづかこふん
鍋塚古墳

しろやまこふん
城山古墳

みねがづかこふん
峯ヶ塚古墳

はかやまこふん
墓山古墳

のなかこふん
野中古墳

おうじんてんのうりやうこふんがいごうがいてい
応神天皇陵古墳外濠外堤

はちづかこふん
鉢塚古墳

やまこふん
はざみ山古墳

あおやまこふん
青山古墳

ばんしよやまこふん
蕃所山古墳

いなりづかこふん
稻荷塚古墳

ひがしやまこふん
東山古墳

わりづかこふん
割塚古墳

からとやまこふん
唐櫃山古墳

まつかわづかこふん
松川塚古墳

じょうがんじやまこふん
浄元寺山古墳

【大阪府藤井寺市・羽曳野市】

4世紀後半から6世紀中葉にかけて形成された、^{おうじんてんのうりょう}応神天皇陵古墳を頂点とする列島を代表する古墳群。5世紀前半に築造された墳長225mの大型前方後円墳である墓山古墳において条件の整った部分を追加指定する。

8 与楽古墳群

ようらくかんすづかこふん
与楽罐子塚古墳

ようらく こふん
与楽カンジョ古墳

てらさきしらかべづかこふん
寺崎白壁塚古墳

【奈良県高市郡高取町】

^{かいぶきやま}貝吹山南麓の尾根上から谷筋に、6世紀後半から7世紀前半にかけて築造された古墳群。渡来系氏族の首長墓とみられる。与楽カンジョ古墳において条件の整った部分を追加指定する。

9 山代二子塚【島根県松江市】

出雲東部の^{ちやうすやま}茶臼山西麓に6世紀後半に築造された前方後方墳。墳長94m、2段築成で幅5～7mの周溝を有し、円筒埴輪や子持壺が出土している。前方後方墳という名称が初めて使われた事例であり、古墳時代後期においては最大の前方後方墳である。周濠のうち条件の整った部分を追加指定する。

10 永納山城跡【愛媛県西条市・今治市】

唐や朝鮮半島諸国との対外関係が緊張した7世紀後半に築造された古代山城。瀬戸内海防衛の一翼を担い、畿内地方への侵攻を食い止める目的で築造されたと考えられる。城跡北端に位置する城門推定地前面部分を追加指定する。

11 小郡官衙遺跡群

おごおりかのがいせき
小郡官衙遺跡

かみいわたいせき
上岩田遺跡

【福岡県小郡市】

7世紀の役所跡である上岩田遺跡と、その2.1km西方に位置する、8世紀の役所跡ちくごのくにみはらぐうけで筑後国御原郡家に比定される小郡官衙遺跡から成る遺跡群である。小郡官衙遺跡において条件の整った部分を追加指定する。

12 たぐまいしはたけいせき 田熊石畑遺跡【福岡県宗像市】

弥生時代前期の環濠や、中期前半の木棺墓群と居住域を検出した集落跡。木棺墓6基からは合計15本の武器形青銅器が出土した。墓域周辺において条件の整った部分を追加指定する。

13 やつしろしるあとぐん 八代城跡群 ふるふもとじょうあと 古麓城跡 むぎしまじょうあと 麦島城跡 やつしろじょうあと 八代城跡

【熊本県八代市】

くまがわ球磨川河口部の八代市街地と東方の丘陵部に所在し、中世から近世にかけて熊本県南部の八代地域の支配拠点となった三つの城跡と関連遺跡から成る。古麓城跡の構造を明らかにする上で重要な部分を追加指定する。

14 おおともし いせき 大友氏遺跡【大分県大分市】

戦国大名大友氏の領国支配の拠点となった遺跡。大友氏やかたあと館跡と上原うえのはる館跡のふたつの館跡、菩提寺である禅宗寺院万寿寺跡、大友氏館跡の南側に近接する推定御蔵場跡おくらばから成る。大友氏館跡及びその北側に隣接する「唐人町跡」とうじんまちの各一部を追加指定する。

15 ちやうじややしきかんがいせき 長者屋敷官衙遺跡【大分県中津市】

北限・南限・東限は溝や柵で区切られ、西限は谷地形を利用した南北120m、東西90m前後の長方形区画の中に、細長い掘立柱建物やそうばしら総柱の礎石建物等が逆L字状に配置された8世紀前半から10世紀前半に属する豊前国下毛郡家ぶぜんのかにしもげぐうけ（郡衙）ぐんがの正倉跡しょうそう。条件の整った部分を追加指定する。

《名勝の追加指定》 2件

1 せいそんかくていえん 成巽閣庭園【石川県金沢市】

加賀藩第13代前田齊泰なりやすの母である真龍院しんりゅういんの隠居所として造営された巽御殿たつみの主庭として、幕末・明治維新时期に作庭された既指定の飛鶴庭ひかくていの区域に、近代を通じて作庭された万年青おもとの縁えん及びつくしの縁えんの中庭並びに玄関の前庭を含む区域を追加指定する。

2 きゅうくらうち していえん 旧藏内氏庭園【福岡県築上郡築上町】

明治中期から昭和にかけて炭鉱・錫鉱山等の経営で財を成した藏内氏の本邸の庭園。住宅・庭園が整備された大正期の様子を今によく伝えていることから、銅像広場、邸宅に隣接する神社の境内、参道等を追加指定する。